



平成31年1月9日
佛教大学附属幼稚園

新年あけまして おめでとうございます。

「お正月づくめー縁起ものー」

園長 田中典彦

あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。

節句や年中行事などには「縁起もの」といわれるものがつきものです。縁起ものとは、行事の際に特別に飾ったり、食べたりされるものです。したがって、それらにはいろいろな意味が付けられて伝えられています。お正月の行事では、よい縁をいただくために祝う品物として「しめなわ」や「門松」などが飾られ、「お節」や「雑煮」が食べられるのです。

「お節料理」とはもともとは平安時代に宮中で行われていた料理を、江戸時代に庶民が生活に取り入れ、広まったものとされています。そして今もなお日本の伝統的な食文化として受け継がれているのです。

子供の頃、元旦のお祝いをする時に、父がこの料理の一つ一つについて意味を話してくれたことを思い出します。鯛は「めでたい」、昆布は「よろこぶ」などは単なる語呂合わせ、エビは腰が曲がるまでの「長寿」、たけのこの「成長」などは意味をとったものです。このように健康、成長、円満、豊作などの願いを込めたもので、実にうまく伝承したものです。いわば生活の知恵なのでしょう。多くのものによって生かされていることを感じ取らせるとともに、それによって人の生きる道を伝えようとしたものであることが解ります。まさに人間の智慧の妙と言いうるでしょう。

そして「お屠蘇」です。屠蘇散と言われ、中国の魏の代の名医華佗が処方した年始に飲む薬で、山椒、桔梗、蜜柑皮などを調合し酒に浸して飲むものです。日本では平安時代から用いられたとされています。1年の邪気を払い、蘇って齢を延ばすという。ところが名前に使われた字の意味が、屠（ほふる、しまいにする）、蘇（よみがえる）と理解されたためか、屠と蘇を一緒に飲むと「0」となるというので、いつしか屠酒と蘇酒として別々に売られるようになったそうです。1年の終わりにすべての邪気を払うために屠酒を飲み、新しい年の始めに蘇酒を飲んで新たな自分を蘇らせるのです。しかし今は一緒に飲んでいきます。

お正月の子どもたちにとっての楽しみは、何と言ってもお年玉でしょう。伝承では「お年玉」はもともと「お年霊」だったそうです。元日の朝、仏壇や神棚から賜った丸い餅でお雑煮を作るのですが、その餅が、私を一年間生かしてくれる神仏から賜った命だと考えられていたのです。この餅が、神仏から命を託された「年霊（賜）」なのです。霊は丸いものと信じられていたのでしょう。この餅は丸くなくてはなりません。いつしか転じて「年玉」となりますが、丸いものの意味から「玉」と表現され、やがて餅から円硬貨（円玉）につながっていったのでしょう。毎年新しい霊を与えていただいて、生かされていることを慶び、再確認し、それに報いることができるように生きていくなさいというのです。これが先人たちから教えられた知識なのです。子どもさんにも伝えてください。

「一年の計は元旦にあり」と言われます。何かいつもとは違ったように感じられるこの朝、「今年こそは・・・」と心に決めるのです。それが言葉となり、思考となり、実行されてゆくことによって人生がきざまれてゆくのです。仏教では「一切唯心造（すべては心によってもたらされる）」と教えられています。

